

## 第1部 イスラームという参照系

未発表原稿

### A イスラームからなにが見えたか

#### 私のイスラーム研究事始<sup>ことはじめ</sup>

##### 江口先生の教え

「借りてきた理論・学説・概念をあてはめて、モノゴトを説明した気になるのではなく、モノゴトのありようを自分のアタマで考え、ナマの具体的な事実から理論をつくりだそうと努力することこそ、大事。」——この心構えを、一九四九年、大学に入学した私は、江口朴郎<sup>ほくろう</sup>（一九一一～八九）という先生からくりかえし教<sup>おそ</sup>わった。

偉大な先生だった。敗戦の混乱消えやらず、赤狩りが荒れ狂い、お隣では中華人民共和国が誕生、朝鮮戦争は一進一退めまぐるしく、日本の大学のキャンパスでは史的唯物論（マルクス主義）や大塚史学（マックス・ウェーバーとカール・マルクスの方法をもとに大塚久雄（一九〇七～九六）が拓いた社会経済史研究）が大流行。そんな時代のなかでの話である。マルクス主義歴史家という評判と関係なく、江口先生が力<sup>ちから</sup>をこめて学生に伝えようとしたのは、〔紀元一世紀に書かれた前漢の歴史＝『漢書』の<sup>かんじょ</sup>一節〕「<sup>じつじきめうぜ</sup>実事求是」（事実<sup>じつじ</sup>に即して真理<sup>めうぜ</sup>を求めると／<sup>どくごう</sup>教条に飛びついてその<sup>とりこ</sup>虜になるな）の精神だったのだナと、振りかえって、シミジミそう思う。

##### 英国史から中東研究へ

学部を卒業して大学院に進んだ私は、一九世紀の英国史から中東・イスラーム研究へと専攻を移し、アラビア語の学習をはじめた。その経緯<sup>いききつ</sup>はあまりに偶然めくので、わけを訊<sup>き</sup>かれれば普段は話をはしより、「アッラーフのおぼしめし」と煙<sup>けむ</sup>に巻いている（アッラーフはアラビア語で「神」を意味し、アラブのユダヤ教徒・キリスト教徒・イスラーム教徒にとって共通の神様）。

このさい要点をいえば、こうだ。卒業論文（米国の南北戦争のあおりで原綿の供給がとだえ綿工業に打撃を受けた英国が、政治に労働者も導きいれる選挙法改正などをつうじて帝国主義化していく、その趨勢を分析しようとした）を書いていたマサにそのとき、日々図書館にかよって読みこんでいる史料（一八六〇年代の英国議会の議事録）のなかで原綿の新しい供給地としてやたらと論議の的<sup>ま</sup>になっていたそのエジプトで、ナセル（ガマル・アブドナーシル）ら軍人のひきいる「一九五二年革命」が起きていたのだった。帝国主義の世界を立体的に（しかも下積みのがわから）眺めてみたいという思いに加え、〔公式的説明でもてはやされていたロシア革命や中国革命にくらべて〕「変調」の革命に正面からとりくむ野心が、私の背中を押した。〔日本に対する戦勝国の〕エジプト王国は、対日サンフランシスコ講和会議に参加したが、翌年革命で倒れる王国の代表団が、外国軍隊の「駐留」（＝占領）に苦しむ自国の立場から、沖縄の置かれる地位を定めた講和条約第三条に対しては態度を留保し、それには縛られないとさえ表明していた。

子どものときから聖書の物語に親<sup>した</sup>しんでいた私は、イスラームに関心を向けたとたん、イスラームではアブラハムもモーセもイエスもムハンマドと並ぶ預言者とされていることを知って、自分<sup>わたし</sup>はもともと中東・イスラームと無縁ではなかったのだと悟る。

##### 問題意識の手がかり

こうして、西洋史を勉強していた者が、やがて東洋文化研究所（助手時代の所属は人文地理学）やアジア・アフリカ言語文化研究所（アラビア部門）に勤務することになる。そうこうするうち、モノゴトから理屈を抽きだすといっても、どんなモノゴトに、どのように眼を向けるのが鍵となるはずで、それを決めるのは「問題意識」だ、ということがわかってきた。だいたい、私が関心の焦点を中東・イスラームに移したのも、直感的なカンのようなものだったが、私自身の内心の「問題意識」がそうさせたのだということに、だんだんと思いついた。

「問題意識」とは、自分自身の生い立ちや人生、衣食住から精神活動にわたる日々の生活、社会・世界とのかかわり方のなかで、どうしてもそれにこだわって考え抜かねばならないような核心的で根幹的でノッピキならぬ問題として、そこに自分自身が呼び出されてしまっていると感じる、そんな「問題の感じ方」だといえるだろう。

まだ気軽に海外に出られる時代ではなかった。私がやっと中東の地を踏むのは、三〇才台を迎える一九六〇年代初め。現地に行くまえに、私は「問題意識」の手がかりを掴みかけていた。

### 多様な顔の使い分け

一点、興味をそそられていたのは、多様な宗教・言語・文化・「族」的結合（家族～民族）が入り混じる中東社会において、人はおのおの自分自身の多様な「顔」を使い分けているらしいこと（エジプトを例にとれば、「エジプト人」／「アラブ」／「ムスリム（イスラーム教徒）」または「コプト（キリスト教徒）」／「マスリー」（エジプト人またはカイロ市民）／「サイーディー（上エジプト人）」／等々、複数の「顔」）。これが、戦時中から敗戦後にかけて東京ついで近郊での私自身の生活体験と、交錯しあう予感がした（神社参拝や皇居遥拝を強制される日本のクリスチャン／「アーメンソーメン」とひやかされる少数派／時局に迎合する教会／軍事教練の査閲のお体裁／軍需工場で勤労働員の生徒として体験した生産現場のたるみ／ベートーヴェンなら許されるSP盤鑑賞／学校から命令されて瀬戸内海は江田島の海軍兵学校予科受験のため往復したさい通過した一年前の「ヒロシマ」の記憶／一九四五年八月おとなたちの豹変／「一億総懺悔」と「真相はこうだ」（指導者に騙された）との使い分けへの抵抗感／「進駐軍」の文明力／占領軍関係者による東大安田講堂での「メサイア」演奏会に立ち会う占領下最初のクリスマス／近郊農家への食糧「買出し」／闇市のエネルギー／じきに消し飛んだ「解放」感／極東国際軍事裁判で「傍聴者」として見る敗者／北海道・沖縄への関心／「逆コース」の本格化／東京近郊の米軍基地をひかえた住宅都市で社会変革をめざす人々の活動ぶりを見るタテマエと現実のギャップ〔セクト主義・官僚主義・性差別〕／など）。

しかし、こうした青二才の未熟な経験や初学者のニワカ知識を自覚的な「問題意識」につなげることができるようになるのは、中東の現地で、人々の暮らしのなかに身を置き、参与する体験を積みかさねる過程で、だった。

### 「都市的」人間のすがた

#### 臨場感と開眼

異国の社会・文化を、そこに飛びこんで、まるごと観察し理解しようとする。これは、

日本の社会・文化の寝床でモノゴトの前後の脈絡などあまり気にもせず過ごしている惰性状態を断ちきる、自覚的「臨地」経験だ。それはちょうど、外国語を勉強してみてもはじめて、無意識に使っていた母語の文法や構文をまなぶ意味がわかってくるのと同じだ。

中東で見えてきたモノゴトのかずかず。//モノの値打ちは、人と人との関係のなかで真剣な議論をへて決まる。合意に達しない場合もある。/商売とは、人・モノ・時空・環境・情報・選好などの「差異性」を取引することだ。/いなかまちでも、情報網は世界大にひろがる。アッタール(生薬商人)のおやじが世界に取引の網目を張るように。/施しを求める乞食がハサナ・リッターヒ(神様に善きおこないを[しなさい])と呼びかける意味の深さ。経済の基本を問う。/親族縁者をふくむ大家族や交友関係など、人の結びつきには自由自在の組み替えがある。/人名は一定せず、状況のなかで変転。/性別・年齢差にかかわりなく、徹底した個人主義。そのくせ、長老・名望家は尊重される。/礼拝や断食をする・しないは個人の自由=自己責任。夫婦・家族のあいだでもお節介はやかない。イスラームは「戒律がんじがらめ」という評判はウソ。/インシャアッラー(神様が望まれるなら)やマレーシュ([起きてしまったことは、神様が定められた結果であって、私に悪気があったせいではない。だから]気にしないで!)など、宗教意識を土台にした日常のきまり文句があらわすのは、契約にともなう責任の強迫観念とその解除装置、そして紛争予防の知恵。/暮らしぶりには、いちいち合理的理由づけの哲学がついてまわる。/ヒト・動植物・モノ万般…めずらしさへの強烈な好奇心と個性認識の妙。/異邦人・旅人が受ける過剰なもてなし、純粋なまごころに驚嘆する。世界中からやってきた人々と接する国際感覚、世間ズレした利害打算の百戦練磨にあきれる。/イスラエル権力がナチまがいの暴虐に訴え、住居を爆破されたパレスチナ人少年が街灯の光で読書にふける、といった情景の組み合わせ。気のめいるチグハグ。/中東社会の底部にうごめく騙し・裏切り・盗み・暴力への衝動。ニガニガしい植民地体験が人のところに刻みつけた暗黒の襲。/……

## アーバニズム

挙げればきりがないうモノゴト群の具体性が、考察を待っていた。

単純な「〇×思考」の二分法も、反対に「清濁あわせ呑む」ノラリクラリ曖昧化戦術も、いずれも受けつけない社会そして精神が、そこにあった。そんなアラブ流思考のフトコロに迷いこんで適応練習をしたあげく、偶然ダマスクスの街で日本映画を観たことがある。登場人物の受け答えや仕草が、瞬間的に私の予期したこととくいちがうので面くらい、根無し草になったような気分で、二重三重の文化ショックを受けた。

中東での日常の暮らしのなかで、ナマ身の人間同士のつき合いをつうじて、人々の思考スタイル、論理と感性、に注目していた私は、おのずと「都市を生きる生き方」(アーバニズム)という角度から人間類型を検証するようになっていった。

中東には、真面目の「都市人間」が存在している。農民も、遊牧民も、こころは都市を生きる「都市型」人間だ。中東は、人類史上はじめて「都市」を発明し、「都市文明」が最初に築かれた場所。「都市文明」はひろく波及していった、中国やインドでも古代文明を成

立させた。そのような文明展開を視野に収めつつ、さまざまな宗教・思想を総合する使命を自覚して立ちあらわれるイスラームは、はたして人間の「都市化」を推し進める宗教となったのだ、と痛感する。日本には中東に「沙漠的」人間をみる伝統（たとえば〔カイロに留学、のち実存主義研究で知られた哲学者〕齋藤信治〔一九〇七~七七〕の『沙漠の人間』〔復刻版〕、三恵社、二〇〇五年、など）があったが、私の認識はちがう。

### 中東の人間像

中東の人間像の特色を、私はつぎのようにとらえた。人々は、一人一人<sup>ひとりひとり</sup>自立的で、〔人間同士の、また森羅万象の〕「雑多」のなかに生きることを「自然」とし、「個」の識別に敏感、「人類」の一員だという意識を生まれつき身につけ、ひろい世界の情報にさとく、「<sup>あきな</sup>高い」に徹し、「公正と安全」を二大価値として重視する（このような観察と関連して、私は牧野信也〔一九三〇年生まれ〕の言語研究面での仕事に注目してきたが、ことに「個」の識別について、牧野信也『アラブ的思考様式』、講談社学術文庫、一九七九年、は参考になるだろう）。

なにごとにつけ、だれもが、理詰めで「法」的に自分の立場を主張する。議論にあたっては、合理性を証明するため、「あれもこれも」と個別的なモノゴトを際限なくあげつらう「<sup>まいきよ</sup>枚挙主義」の戦略をとる。「あれかこれか」と考えるときも、かならず、第三項なり中間の移行形態なりをしっかりと予定する。人の行為を五種類（ワージブ=義務、マンドゥーブ=したほうがよい、ムバーフ=合法、マクルーフ=しないほうがよい、ハラーム=禁止）に分けて評価するのが、イスラーム法である。私たちに<sup>みぢか</sup>とって身近な、学校の成績評価やアンケートの回答方式も、似たような五段階区分を採用している。論理的で現実的な考え方だからだ。

宇宙万物は、数えあげたら気が遠くなるほど、あまたの「個」からなる。それらは相互に結びあう関係性の網目のなかで対等・平等だ、という感覚があるから、<sup>こうへい</sup>衡平（つりあい）がことさら重要な準則となる。都市を生きる生き方では、どうしても枚挙主義になるから逆に、信念に裏づけられた「原理原則」が絶対に必要、ともされるのだろう。

### 「自分探し」の本家

#### 一筋縄ではダメ

自分の多様な「顔」を百面相<sup>ひやくめんそう</sup>のように使い分ける実際のありさまに、いろいろの場面で立ち会った。アタマでは一般論として理解していたつもりでも、一瞬のできごとが新しい発見の驚きを生む。// 同族でもヨソヨソしく扱うかと思うと、異国の異教徒を「アダムの子孫」同士とあたたかく抱擁する。/ 宗教が異なる人々が、互いに他の宗教の<sup>げきから</sup>激辛批評を仲間うちではしあっているのに、祭りの日には宗教施設を訪問して祝いあい交歓しあって、連帯の真情をとりかわす。/ 血縁や宗教や主義主張や派閥の話などそっちのけ、郷土愛に根ざした同郷・地縁の結びつきが優先する場合もある。/ 「不正」に<sup>ズルム</sup>反発する人々の怒りが、宗教のちがいどころか地域や国をもはるかに超える結束を生みだすことがある。

このような動態を説明するため、私は、「変形自在の〈家族〉のかたち」（図1）と「中東における宗教・宗派」（図2）という見取り図を考案した。

### 名前がいくつもある

〔図1〕「変形自在の〈家族〉のかたち」 中東では、人の名づけは一般に、父かたの血統をたどる形式をとる。この場合、姓はない。女性は結婚しても、結婚契約の片側の独立した当事者として、名前は変わらない。ある個人Xがいて、父がY、祖父がZだとすると、Xは、X・イブンまたはビントY・イブンZ（Zの息子のYの息子または娘のX）を略して、XYZと呼ばれる（アブラハムの子イサクの子ヤコブの例でいえば、ヤコブ・イサク・アブラハム）。だが、その名もすこぶる流動的だ。三代と限らず祖先～子孫の幅を変えたり、子どもを基準点においてアブーQ（Qの父親）やウンムR（Rのおっかさん）と呼んだり、別の命名法（たとえば、出身地／職業／身体的特徴／尊称／等）を附加するなどして、自由に変換できる。彼また彼女の名は、自称・他称ともに、社会状況のなかで時々刻々、変形するのだ。

もし、Xの祖先のなかでAがとりわけ重要人物だとすると、XはバヌーA（Aの子孫たち、Aの子ら、A部族）に属し、XAのように名前にAが示されることによって同じ家門「Aの子孫共同体」の他のメンバーと同族意識を分かちあうことになる。しかし、バヌーAは、他の先祖Bを起点にすえるバヌーB（Bの子ら、B部族）にいつでも柔軟に置き替わるし、それと重複したりすることもできる（新約聖書の冒頭の句、「アブラハムの子ダビデの子イエス・キリストの系図」のように）。さらに人類の祖とされるアダムまでさかのぼって、「バヌー・アードム」（アダムの子ら、アダム族＝人類）意識とも簡単に連結する。

このようにして、固定した部族の運命的<sup>きずな</sup>絆などというものはなく、とり替え簡単。ひろい意味での「家族」（私たちのいう親族をふくむ）のサイズが、拡大も縮小も臨機応変。伸縮自在の家族は、最小の家族ポテンシャルが個人、最大の家族が人類なのだ。各個人が、自分の属する「家族」の枠<sup>わく</sup>を、たえまなく設定しなおしている。個人が人類とつながり、人類が収斂<sup>しゅうれん</sup>して個人にやどる。この壮大な普遍主義の構図には、国家やナショナリズムなど顔<sup>がんしよく</sup>色なく、もぐりこむ隙間<sup>すきま</sup>もない。

#### 宗教のくくりかた

〔図2〕「中東における宗教・宗派」 注意が必要なのは、宗派の多様さだけでなく、それらをくくりあわすグループ分類の多様さである。宗派内部の抗争・亀裂という細分化の方向もないわけではない。だが、重要なのは集合の方向で、いくつもの宗教・宗派をまとめる組み合わせが幾通りも成り立つことだ。ユダヤ教徒やキリスト教徒を、さらにゾロアスター教徒やサービア教徒まで含めて、「啓典の民」（啓示の書を受けとった人々）と一括し、ムスリム（イスラーム教徒）とともに一体のグループと認定するのも、その一つ。

他方、同一宗教の内側でも、ある人がイスラーム教徒（ムスリム）であり／シーア派であり／十二イマーム派の信者／であることが同時に成り立つように、別のある人の場合は、キリスト教徒／メルク派／ギリシア・カトリック／ユニアット（ローマ教皇の首位権を受けいれる「合同帰一」）教会の信徒／東方諸教会に属する信者／といった多様な「顔」が並存する。

キリスト単性論派（モノフィジート）諸教会やネストリウス派（アッシリア教会）の東方キリスト教徒は、ローマ・カトリック教会（ラテン教会）やギリシア正教会と対面する場面では、むしろイスラーム教徒に親近感をいだけく歴史伝統をかかえている。以上のようにして、こ

こでもまた中東の人々は、宗教・宗派の固定した枠にガンジガラメになるどころか、自分の立場の自由自在な組み替えを日々実践しているのである。

### 日本社会の中東化

誕生すると宮参り、結婚式は教会で、死ねばお寺でお葬式。これが格別異常でない日本社会。外国の知人にクリスマス・カードを送る人が、除夜の鐘を聞いて神社に初詣で。これは「中東」的といえなくもない。そのうえ、ちかごろは一人の人が、会社勤め／地域ボランティア／PTA役員／フリーマーケット出店者／資格取得専門校の学生／海外エコツアー常連／ブロガー／等々、さまざまな「自分」をもっていて、その多様な「顔」を使いわけて暮らす人がおおくなり、「自分探し」の意味がようやく理解されるようになった。中東は「自分探し」の元祖というべき場所だ。古来、多様な人々が集まり／出会い／取引する／「都市」の性格をおびた地域だったからである。

だが、私が「多様な自分の選び分け」の問題を議論しはじめたとき、それを理解してくれる人は、まだほとんどいなかった。

### アイデンティティ複合

#### わたしはナニモノ？

中東に棲む人々を身近に感じながら、「都市人間」のすがたについて考えをめぐらしていた私は、その理解の「かなめ」として「アイデンティティ複合」というアイデアを温めはじめた。一九六〇年代半ばにさしかかるころのこと。このとらえ方は、その後、私が研究の新局面をひらくさい、原点となり、観望台となり、推進力ともなった。ところが、はじめのころは、「複数のアイデンティティ？そんなものはアイデンティティではない」、これが私の話を聞いての友人同僚の一般的反応だった。

「アイデンティティ」とは、「自己同一性」と訳されたりする。要するに、或るモノについてそれがナニモノであるか、つねに同定できるような終始一貫変わらぬ在り方が見定められること。或る人[たち]・モノ[たち]の「存在確認」、「存在証明」といってもよい。モノの実体はそもそも「在る」のか、それとも「成る」のか。紀元前五世紀、南イタリアのギリシア人哲学者で存在論的「同一性」(同じモノであるコト)の問題を提起したパルメニデスが、モノゴトの多様性と生成運動に着目していたミレトス学派のアナクシマンドロスやアナクシメネス、小アジアのヘラクレイトスらを批判したあたりから、えんえんと現代までつづいてきた論争テーマが、「アイデンティティとは何か」だった。

私が「アイデンティティ」論の自家製モデルを導き出したのは、まえにのべたように「族的結合や宗教的帰属をめぐる人々の思考・行動様式を観察した結果だが、それに付随して、二〇世紀「パレスチナ問題」がヨーロッパの「ユダヤ人問題」を素地に展開する仕方を批判的な眼で追跡するようになった結果でもあった。

### ユダヤ人差別

ヨーロッパのキリスト教は、人を見たら「ユダヤ人か、ユダヤ人でないか」を見わける二項対立的な二分法思考のクセを世にひろめた。みずからは「異邦人(=非ユダヤ人)の宗教」

だといって（新約聖書使徒言行録 28 章 28 節）、「神殺し（キリスト殺し）」ユダヤ人を摘発・差別し、追放・迫害し、略奪・殺戮する歴史をくりひろげる。

こんなイジメにあった人々にとっては、共生の「都市」的世界＝中東は、あこがれの避難所、夢にみる安住の地と見えただろう。ユダヤ人＝「他者」の話など成り立ちようもない多様性の社会。そこでは、ユダヤ教徒が〔ユダヤ「人」としてでなく〕アラブの一員として名誉ある地位を占めて安全に暮らしていたし、西欧出身の〔キリスト教徒の〕侵略者＝十字軍士であっても帰国せず残留して住人になれば、アラブの仲間うちに吸収・包容していった。

ところが、これに対して、一九世紀末から東欧・ロシアを中心にヨーロッパで展開するシオニズム運動がやったことは、二つ。第一は、ヨーロッパ史をつらぬく反ユダヤ主義（その極限はロシア帝政、さらにナチズム）に便乗して、「ユダヤ人」という差別レッテルを貼られた人々を欧米社会のなかからリクルートし、パレスチナに植民者（棄民）として送りこむ事業。第二は、パレスチナ現地でアラブ住民の一部をなすユダヤ教徒を「ユダヤ人」にすり替え、他の同胞アラブから引き剥がして対立へと誘導しながら「非アラブ」化する事業。

このようにユダヤ人差別の空間を拡張し重層化する動きは、それへの加担・適応・屈服・面従腹背・抵抗・対抗など揺れ動くさまざまな態度のさまざまな表現が交錯する「場」を世界中に押しひろげ、中東ではもともと個々人の生き方にそなわるアイデンティティ「複合」を、なおさら緊張感にあふれ葛藤<sup>かつとう</sup>にみちたものにしたのだった。

### 「ユダヤ人とは」の紛糾<sup>ふんきゅう</sup>

一九四八年イスラエルが「ユダヤ人国家」の看板をかかげて成立すると、まもなく、「ユダヤ人定義問題」（だれが「ユダヤ人」か？）がその国家と社会を揺るがす争点になりはじめる。世界中からユダヤ人を集めるという「帰還」法（一九五〇年制定）。「自分は〔また子どもは〕ユダヤ人だ」と名のってイスラエルにやってくる人は、名のりさえすれば全員ユダヤ人なのか？という問題が浮上する。さらに、欧米の反ユダヤ主義がなければユダヤ人の国づくりは進捗<sup>しんちよく</sup>しない、というシオニズムの矛盾も、また抜きさしならぬものになる。

ポーランドでユダヤ人としてナチ占領下を生き抜き、修道院にかくまわれてカトリック神父となったオスワルド・ルフェイセンが、イスラエルに移住して国籍を請求したところ、「キリスト教の聖職者では」と拒否されて訴訟となり、連立内閣が崩壊しかけるダニエル神父事件。／ポーランドのユダヤ人の父とドイツの非ユダヤ人の母とのあいだに生まれ、ワルシャワ・ゲットー蜂起を生きのびてイスラエルに移住、労働党员としてナザレ市の市議会議員となるが、母方の出自を嗅ぎつけた政敵が彼女を非ユダヤ人だと非難したので、パスポートの返還を要求されたリナ・エイターニ事件。／海軍士官ベンヤミン・シャリットとその妻（フランス人・スコットランド人の両親とも非ユダヤ人）とが、ともに無神論者として、息子オレンと娘ガリアを「〔国籍〕ユダヤ人・〔宗教〕ナシ」として登録替<sup>か</sup>えするよう求めた提訴をめぐり、政府と裁判所が対立して政治危機が発生した事件（のちに、父シャリットは出生した第三子を「ヘブライ人」と申告して裁判所に却下される）。／テルアヴィヴの改革派ユダヤ

教ラビのもとで改宗した元クリスチャンの米国市民が、正統派ユダヤ教の手続きによらないという理由で当局からユダヤ人認定を拒否されたヘレン・ザイドマン事件。／身分証明書の記載を「ユダヤ人」から「イスラエル人」に変更するよう求めたジョルジ・タマリン事件／等々、法廷の争いが頻発し、イスラエルという国の根柢に影を投げかけていた。

#### ユダヤ人定義問題

イスラエルでは、「ユダヤ人」の法的定義は「ユダヤ人を母とする者またはユダヤ教徒」とすることになった。血と宗教に基準を置くユダヤ教法規<sup>ハラハ</sup>を準用したもの。これを個別の事例にあてはめると、「ユダヤ人国家」の危うさが露呈してくる。定義が定義されることばをふくむ同語反復<sup>トートロジー</sup>の欠陥も問題だが、ここで「定義」する行為を支えている人種〔差別〕主義そのもの（ナチの反ユダヤ主義立法<sup>たば</sup>を束ねた「ニュールンベルク法」〔一九三五年〕とも類似の）が、イスラエル国家の墓穴を掘ることになりかねない。

ましてイスラエル社会では、ユダヤ人といっても一体ではない。アシュケナズィーム（欧米系）、スファラディーム（スペイン系ないし非欧米系）、ミズラヒーム<sup>オリエント</sup>（東洋系）など（のちには、エチオピアからの「ファラシヤ」集団やソ連・ロシアからの移民も加わる）のあいだで、厳然たる社会的格差や差別がはたらいっているからだ。

#### パレスチナ人とは

ところで、さらに重要なのは、「ユダヤ人国家」が成立した結果、あたらしい意味でたち現われる〈パレスチナ人〉という存在だ。一九四八年の「ナクバ」（アラビア語で「大災厄・大破局」）と呼ばれる「民族浄化<sup>エスニック・クレンジング</sup>」的住民追放と土地・家屋の略奪は、いまなお世界最大規模のまま放置されているパレスチナ「難民」問題を発生させた。郷土を失い、家族はバラバラ、運命を分断されて世界に四散した「離散<sup>ディアスポラ</sup>の民」。「ユダヤ人国家」の建設が、新しい「ユダヤ人的」存在を産みだしてしまったのだ。

この〈パレスチナ人〉の境涯は、千差万別。たしかに共通項はある。// 第一次世界大戦後の英国支配が括りこんだ「パレスチナ人アラブ」という枠組／歴史的シリア〔シャームの地〕の南部地方住民が受け継いできた文化伝統／など。だが、人々のあり方は、運命の非情に翻弄されるまま、漂着したり居ついたりした離散の場所ごとに、極度に異なるものとなった。不利な条件のきびしさ加減も、ムスリムかキリスト教徒かで、ちがったりする。

世界に追い散らされ離散<sup>ディアスポラ</sup>の地をさまよう人々は、それぞれ流亡の悲嘆にくれながら生きのびなければならない。彼らの定着度・適応度・境遇はさまざまだ。イスラエル独立にともない、旧「パレスチナ」はイスラエル・ヨルダン・エジプトのあいだで三分割された。イスラエル領域に踏みとどまった者は、ユダヤ人より下位の〔アラブ分断政策で別格に扱われた〕ドルーズ派など少数集団より、さらに下積みの三流イスラエル市民＝「アラブ」と位置づけられる。ヨルダン領（ヨルダン川西岸地区と東エルサレム）やエジプト支配地区（ガザ地帯）に組みこまれた者は、「ヨルダン国民」やエジプト管轄下「パレスチナ人」となった。

だが、これもつかのま。一九六七年「六日戦争」によって、イスラエル軍がこれらヨルダン領・エジプト領をまるごと、それにシリアのゴラン高地まで、占領・略取すると、



ここに「[イスラエルに占領された被] 占領地 [の] パレスチナ人」という存在が出現する。また、イスラエルは武力制圧した東エルサレムを、世界中の反対を押しきって自国領土に併合したので、東エルサレム市民はイスラエルの主権下に編入され、「占領地パレスチナ人」とは異なる地位を押しつけられる。さらにゴラン高地も、イスラエルに併合された。

### 中東・世界・私

以上のように、ひろく世界という離散地／アラブ諸国内部／イスラエル国内とその占領地・併合地／にまたがって、存在の仕方をズタズタに切りさいなまれた人々。彼らが、境遇の違いを乗り越え、〈パレスチナ人〉というアイデンティティを獲得し選択していくのである。その様相を、私はまのあたり観察した。イスラエル国家と対立するようであり、じつはそれとセットになった「アラブ諸国」の体制が、〈パレスチナ人〉の民族意識の躍動に出くわして、ひるむありさまも目撃した。

「ユダヤ人問題」を外側からムリヤリ押し付けられ埋め込まれた中東の社会・文化。これを「アイデンティティ複合」の視角から批判的に吟味するという課題を、こうして私ははっきりと自覚するようになる。ユダヤ人問題の歴史と現実／そして〈パレスチナ人〉意識の形成／をしらべて歩く私のフィールドは、一九七〇年代をつうじて、トルコ、イラン、湾岸諸国、イエメン、マグリブ諸国から、東欧、西欧、米国、東・東南・南アジアへと拡大していった。中東は世界化し、世界は中東化する。中東で「アイデンティティ」を問うことが、中東・ムスリム世界を超えて、おのずと人類社会の／そして私自身の／アイデンティティの問いなおしにも、つながっていくことを痛感した。

### 近代性を見なおす

#### エリクソンの概念

私が「アイデンティティ複合」あるいは「アイデンティティ選択」について考えはじめたとき、それは、米国の発達心理学・精神分析の専門家E・H・エリクソン（一九〇二～九四）が人間のライフ・サイクル（ことにその青年期）を理解する鍵として「アイデンティティ」概念を使ったことが注目されるようになる時期とかさなった（*Identity and Life Cycle, Selected Papers*, 1959）。エリクソンの概念は、一九六〇年代をつうじて世界的に有名になり、やがて社会学・政治学・文学などの分野でひろく利用されるようになる（日本語での紹介は、小此木啓吾訳『自我同一性—アイデンティティとライフサイクル』、誠信書房、一九七三年、など）。だが、そのころ私は、かなたの別コースを並走するエリクソンを遠望しているような気分だった。

当時、彼の眼目は青年期の心理だったが、私は、中東の人々の生きざまやパレスチナ人の「ユダヤ人」化の解読に熱中していたからだ。でも、エリクソンは欧米社会でユダヤ人とみなされ、陰影に富む人生行路を歩んだから、彼の生涯をかけた仕事の基底には、反ユダヤ主義の克服という初心がズシリと重い「隅の親石」としてあったに違いない。一九六〇年代に私が彼を「遠く」かつ「近く」感じていたのはそのためだ、と納得している。

#### 自己ネットワーク

エリクソンと私とは、見る方角が反対になっていた。エリクソンは、自我が、内面でも他者との関係でも、同一性・連続性を確保するため、バラバラに分解しそうな自我を上位の自我でもって「統合」する、そうした「統合」の仕組みがはたらく「事実」に「アイデンティティ」を見た。これに対して、私のいう「アイデンティティ複合／選択」では、主体としての自己が、与えられた状況下で状況にはたらきかけるため、さまざまな自己表象(発露)を自覚的に獲得し、そのアレコレを選び分けて変換的に繰り返しながら、つまり「変身」しながら、自己を「実現」していく、その運動「現象」のなかに「アイデンティティ」をとらえようとした。「拡散」的な自分を展開し連結することによって、「統合」的な主体としての自己が成り立つ、と考えるのだ。多様な自己を組み替えネットワーク化するところに、自己の同一性が実現する。「わたし」は「成る」モノとして「在る」。

#### 関係性の網目

「[自己] 疎外」(自己のおおもとで外化・他者化が発生して、同一性がゆらぎ、別のモノになること)という用語もある。この「疎外」という概念を使いはじめたヘーゲル以来、人間存在の分裂やすり替えがおきる事態について、哲学的思索が深められてきた。しかし、「アイデンティティ選択」という主体的行為の意味を、社会の機構／歴史の規定力／生態環境の条件／などと具体的に関係づけながら、立体的・構造的に問いつめていく作業をやってみると、「疎外」をふりまわす議論ではとかく論理が空回りしている欠点が目についた。

まえに「衡平」(つりあい)について触れたとき、宇宙万物の一つ一つの「個」が「関係性の網目」のなかにあるという、中東の人々持ちまへの感覚に結びつけて、私は説明した。人間存在も錯雑に複合した「関係の場」のなかにある。多軸の座標系だ。もう一度「家族」に目を向けると、「わたし」は親から見れば「子」だが、「わたし」の子から見れば「親」。その伝で、「孫」・「ひ孫」・「おじ | おば」・「おい | めい」・「いとこ」・「またいとこ」、ときには「じじ | ばば」まで、見る角度によってちがうイロイロのあり方が、たった一個の「わたし」のなかに詰まっている。このようにして、社会・自然・宇宙のなかで多角・多面・多軸・多層的に「わたし」をとりまき、「わたし」を生かしている無限の「関係性の網目」複合が、「わたし」という一点に凝集するのだ。この現実態がもつゆたかな可能性を自覚的に活かそうとするとき、「わたし」は「わたし」になる(「わたし」の一貫性が実現する)。この人間的開花をめざす主体的いとなみが「アイデンティティ選択」なのだろう。

#### 自分を結び合わす

説明のため、私がよく引き合いにだしたのは、名刺。肩書きの異なる自分の名刺を各種とりそろえもつ人が、出会う相手ごとに、適当な肩書きの一枚を選びだして自己紹介する。たえまなく「自分を選び分ける」生き方が充満している社会・文化を相手どり、日本でも珍しくないこんな事例の意味を考えなおしていた私は、結局、以下のような判断にいきついた。この変わり身早い生き方を、人間的イイ加減さ／「ジキル・ハイド的」多重人格／人格「解離」／と見なしたり、他人をだます詐称／その場しのぎの責任回避／風見鶏の日和見主義／などと片づけたりするわけにはいかない。それどころか、逆に、個人個人が

与えられたあらゆる状況のもとで自分の責任において人間としての「真実」をマジメに追求する側面が、そこにあるのを否定できないのではないか。ここで認めるべきは、自立する個人、／状況と向かいあう合理性、／人類・宇宙にひらいた強靱な普遍主義、／なのだ。

モスクからはみだして路上まで埋めつくす人々がいつせいに平伏する情景から、「個」を滅するおぞましい集団主義と見られたりするイスラームの金曜礼拝。だが、そこにつどう群衆の一人一人がじつは欧米人顔負けの「近代的」人間だという側面を、見合わせる必要がある。イスラームは、中東で古来（「古代オリエント+古代ギリシア・ローマ」以来）探求されてきた生き方の「原則」を総まとめ体系化し、その立場から世界・人間の「現状」にたえず批判を突きつけ反省するものとなった。その宗教の特質は、個々人の「自分を選び分ける」生き方を支え導くだけでなく、そのような生き方の粋を体現するところにもあるといえるだろう。

### 近代性の起源

「アイデンティティ選択」という観点が私に開いてみせてくれる世界は、どんどん拡大していった。多様なアイデンティティを選び分けて生きる、とは、「都市を生きる」（都市化）／「商業を生きる」（商業化）／「政治を生きる」（政治化）／ことである。それは、個人主義／合理主義／普遍主義／が、人間的・思想的・社会的・制度的な次元で発展・展開する基盤となるものだ。自由／平等・衡平／同胞愛[友愛]／の理念が、こうしてうち立てられる。このような発展・展開を導く「システム」をととのえて本格的に始動したのがイスラームだとすれば、「近代」／「近代性」はイスラームに起源をもつことになる。これは、西欧発「近代性」が世界を覆いつくすのが「近代」だと考える歴史の見方をくつがえすものだ。

一方に、「近代」はヨーロッパの専売特許、「近代化」とは疑う余地なく「ヨーロッパ化すること」、という「約束ごと」があり、他方に、時代おくれ=因襲まみれのイスラームは「近代化の阻害要因」、と決めつける「通説」があった。これらは、表裏一体、イスラームの「近代性」に煙幕を張って見えなくするシカケだったのではないか。こうして、私のアタマのなかで、ヨーロッパ中心主義への批判の土台と「〔西暦〕七世紀からの近代」という世界史の構想とが形をなしてきた。

第二次世界大戦後はじめて、日本のイスラーム研究者（当時はまだ少数だったが）を網羅する共同研究を組織したとき、私は自分の仮説を前面に押し出すことはしなかったが、それでも「〈イスラーム化〉と〈近代化〉」というテーマをかかげた。その背後には、私の理論予測が秘められていた（全国共同利用研究所だった当時の東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所が、一九六七年度から開始したプロジェクト「イスラーム化と近代化に関する総合的研究」）。二つの概念それぞれを検討すると同時に二つをつなぐ「と」の意味をみんなで考えよう、という合意のもとに成り立った陣型だった。研究者として懐がひろく深い前嶋信次（一九〇三～八三）・嶋田襄平（一九二四～九〇）という先達の理解と応援とが、これを可能にしてくれた。

### 「n地域」の理論

### 通念を疑うこと

「現地」で観察し／交流・交感し／理解し／記録・記述し／考察し／理論化する／「臨地研究」は、いくら強調してもしきれぬほど大切だ。だが、それを成り立たせるには、コミュニケーション能力（ことばと人格）はもちろんとし、「問題意識」、そして「歴史を見ぬくカン」が、絶対に必要だ。これらを鍛錬するには、書物（良書・悪書、古典的・先端的研究）の勉強も欠かせない。しかし、それでも<sup>オリジナル</sup>独創的な突破口が見つけれられないかもしれない。そこで、私の<sup>えとく</sup>会得した手っとり早い「とりくみ方」のヒントを挙げておく。まずは「通念を疑う」ことから取りかかる、がそれ。「あたりまえ」すぎてだれも疑わない常識／社会全体の思いこみ／思考の慣性／、これらは丁寧に眺めなおす価値のある貴重品だ。発見の「鍵」がそこにこそ眠っているのだから。世界の見方を一変させる「鍵」が。

### <sup>レディメイド</sup>既製の民族・地域なし

中東でアイデンティティ複合の奥深さにいったん目がひらかれると、私はたちまち一般的（超域的・通時的）な理論モデルとして「n地域」を考えつくようになった。一九六七年の暮れちかくのことだ。これは、「国」／「国民」／「民族」／「国際社会」／「地域」（大小さまざま）／など、ごくあたりまえに実在すると思われる空間や集団について、それらの観念を突き崩してみる仕事だった。

「アイデンティティ複合」の視座からは、人が実際に「生」をいとなむ「地域」の多様性・多元性と、たえず組み換えがおこなわれ伸び縮みが起きている「地域」の可変性とが、すぐ見えてきた。また、「民族」は、固定された運命的な仕切り・色分けによって必然的に決まってしまうような集団の「お仕着せ」<sup>しきせ</sup>枠<sup>わく</sup>などでない、ということも。状況しだいで結合が生まれ、分解したかと思えば突然、予想外の<sup>ひろがり</sup>拡がり<sup>ひろがり</sup>で再構築されたりする、そんなダイナミックな形成体。つまり、共同の「主体」（「われわれ」）を選び分け選り分けて実現し獲得していく人々の「意識」なのだ、ということに、すぐ気がついた。「地域」も「民族」も最初から実体が決まっているのではない。やはり「成るコトによって在る」モノなのだ。

### P×R対Qの構図

「n地域」〔図3〕は一九六〇年代末に作図したものだが、あとになって、私はこんなふうに解説している。

むかし、「n地域」という作業モデルを工夫して、提案してみたことがあった。埋め込まれた差別体制の重層構造を拡大的に再生産する力（P）に抵抗して、差別の克服と連帯の獲得をめざす民族運動（Q）が生じ、次にこれへの対応的・対抗的<sup>たいこうてき</sup>なクサビとして打ち込まれることになる政治的・イデオロギー的組織化としての民族主義（R）がQと<sup>きつこう</sup>拮抗することにより、P×R対Qという抗争が展開する場として表現されるn地域が、そこでは考えられていた。n地域は一般モデルなので、たとえば、一九世紀末の「日本と朝鮮とにまたがる地域のなかの一部分としての沖縄」にそれを設定してみるというように、それは可変的で、置き換え可能であるが、それだから、いかなるP×R対Qに即して、いかなるnを、問題にするかが争点になる。また、その脈絡で、上記の沖縄にフィリピンや米国やハワイを加えた飛び地

の集合を一地域  $n$  として設定しなおすことが必要な場合も生じるだろう。そのうえで、さらに  $n$  を変換しつつ、この問題を、それが一小村落もしくは一地点〔論理上、最小の地域は個人〕に収斂する場で観察することも、または人類的・地球大的規模に一举に拡大して眺めなおすことも、可能なはずである。人間がさまざまな可能性をもった  $n$  地域に内在化し外在化しつつ生きるものだとすれば、思想史への新しい視野も開拓できよう（『歴史の現在と地域学』、岩波書店、一九九二年、五～六頁）。

### 世界を映す自分

「 $n$  地域」論を考えだすまで、〔十分に気がついていない場合もふくめ〕あまたの方面から暗示と刺激をいただいた恩恵を忘れてはならないと思っている。研究者の想像力<sup>イマジネーション</sup>という面では、〔イスラーム研究に郷愁をもちつづけた中国研究者〕野原四郎（一九〇三～八一。『アジアの歴史と思想』〔弘文堂、一九六六年〕の著者ならでは、おりおりの味わいある談論）や〔日本の百姓一揆など民衆史の研究者〕林基<sup>ぼやしもと</sup>（一九一四年生まれ。ソ連科学アカデミー版『世界史』の紹介に注がれた活力は尽きず、『松波勘十郎捜索』上・下〔平凡社、二〇〇七年〕に及ぶ）のような存在にただよう気<sup>オーラ</sup>の感触が、私のところにいまも去来する。

私がしばらくは教室や研究会でしゃべっていた「 $n$  地域」論を学会で発表した（七三年春）のち、それが引きがねとは思わないが、「自分史」を書く運動がひろがった（その提唱者は、色川大吉〔一九二五年生まれ〕。色川大吉『ある昭和史 自分史の試み』、中央公論社、一九七八年。同『自分史 その理念と試み』、講談社学術文庫、一九九二年）。自分の内側に、あるいは自分が踏みかためた地点、あゆんできた経路に、世界が凝縮されている／自分は世界を映す鏡だ／という考え方が、日本社会のなかで理解され、ひろがりだしたことに、私は意をつよくした。

### 争奪される民族

どんなどころが、私のいう「 $n$  地域」のミソだっただろう。「地球プラス一部宇宙空間」（一九六〇年代〔六一年＝有人宇宙飛行、六九年＝月面歩行〕は宇宙時代の開幕だった）という規模に拡大しても、「個人の胸三寸」に縮小しても、入れ子<sup>い</sup>重<sup>こじゅう</sup>やマトリョーシカ（人形）よろしく同じ（相似の）構造が見えてくる、そんな変幻自在の〈地域〉を構想する／また、同じ土俵のうえで「民族運動」（図では楕円）と「民族主義」（図では三角形）とが「民族」を奪いあつてせめぎあう動きを想定する／というあたりだろうか。

「 $n$  地域」（図では菱形<sup>ひし</sup>）をガラガラッと拡大したり縮小したりしてみながら、設定条件ごとに浮かびあがる「帝国主義＝民族主義体制」対「民族運動」という対峙<sup>たいじ</sup>の構造について、その現われ方<sup>うつりかわり</sup>や遷移<sup>うつりかわり</sup>の仕組みを記述し解明する。これによって、部分にやどる全体を発見し、〔階段ピラミッド状に〕層をなす全体性の各レベルを節々<sup>ふしぶし</sup>ごとに見くらべながら、時間・空間認識を鍛えようとするプランだった。

なによりまず、概念は柔らかく揉みほぐす。// 「帝国主義」（タテ〔重層化〕・ヨコ〔拡張〕ともに増殖的統合の動機づけがつよくはたらく支配システム）・「民族運動」（コミュニケーションの拡充を利用しながら差別のミゾを乗り越えてヨリひろい集団をつくりだす自主的・自発的な「主体」形成）・「民族主義」（民族運動に応答するふりをして統制する〔衣の下に鎧<sup>よろい</sup>の〕支配イデオロギー）という式で。これらおのおのの布置や相互作用関係は、つぎに示す図式（つながりあつた論理パタン）のよ

うな流れのなかで決まっていくなを見る。

「n 地域」が析出されるプロセスの図式。// 政治支配は差別 [秩序] をつよめ、その積層化をすすめる。これへの反作用 (抵抗) として「民族運動」が生<sup>しょう</sup>じる。これを制御するため、政治支配は「帝国主義」に傾く。それには、「民族運動」を手なづけ方向づけて管理・抑制する「民族主義」が必要。そこで、「帝国主義・民族主義」体制と「民族運動」とのあいだで不断に対抗=対応<sup>やりとり</sup>の応酬が展開する。このような対抗=対応関係のパターン認識でとらえられる「政治」動態を、「n 地域」の原基構造と予定した (x x x 頁参照)。

#### **n 地域の応用問題**

この作業モデルは、使っている用語のせいで、近現代の国際政治にまつわる話と誤解されることがある。だが、考案した最初から、n 地域は「本国・植民地関係」や「国民国家」を組み替えるだけでなく、古代の「帝国主義」や「民族主義」にも適用できると考えていた。そればかりか、n 地域の「民族運動」は、フェミニズムにも/ヒッピー (一九六〇年代後半、米国から世界にひろまった若者文化) の潮流にも/別次元の例では [有機水銀中毒による水俣病が熊本県水俣湾と新潟県阿賀野川流域とをつなぎ合わせ、さらにカナダのオンタリオ州やイラク南部とも結びつくような] 公害被害者の立場にも/あてはまると考えていた。

できたてホヤホヤ「n 地域」モデルの解説では、そのころ神津島<sup>こうづじま</sup>での顕彰行事などから注目されるようになった [朝鮮人キリシタン] おたあジュリア (生没年不詳) の話<sup>やく</sup>が役に立った。豊臣秀吉が対明政略として開始した朝鮮侵略 (文祿の役<sup>えき</sup>=壬申倭乱<sup>じんしんわらん</sup>、一五九二~九三年)。先陣をつとめ平壤<sup>ピョンヤン</sup>を占領したキリシタン大名アゴスチイノ小西行長 (堺の豪商出身)。拉致された少女は小西の許<sup>もと</sup>で日本に連行され、洗礼を受ける。関が原の戦いののち、駿府の徳川家康の大奥に仕えるが、禁教令にそむいて信仰をまげず、伊豆七島に転々<sup>はいろ</sup>配流された。おたあにとって n 地域は、朝鮮と伊豆七島・日本各地を結び、中国・フィリピン・カトリック世界と諸修道会・英国・オランダなどまで見とおす拡がりをもつものだったかもしれない。

のちに (一九七五年)、サハリン先住民族ウイльта (オロッコ) のダーヒンニエニ・ゲルダーヌ (?~一九八四。大日本帝国軍人としては北川源太郎) をもてあそんだ波乱の運命が明らかになると (田中了・北川源太郎『ゲンダーヌ ある北方少数民族のドラマ』、現代史出版会、一九七八年)、日本国家とシベリアを結ぶ広大な舞台が [通称] ゲンダーヌの n 地域として浮かびあがった。

歴史のなかで、n 地域という視座の効用は、遠く離れてなんの連絡も交渉もないように見える複数の社会・人々・思想の結びつきや相関を問題にするところにある、とも考えた。これは、カール・ユング (一八七五~一九六一) が因果関係とは無縁な符合連関として着目した共時性<sup>シンクロシティ</sup>や量子力学において問題とされる非局所性<sup>ノンロカリティ</sup>などとも、つながりあうはずである。一九世紀、日本の自由民権運動とエジプトのオラービー革命の並行性、わけても近衛連隊の蜂起 (竹橋事件 [一八七八年] とアープディーン宮殿事件 [七九年・八一年]) の同期性などは、その例だ。一三世紀後半、モンゴル帝国が日本とマムルーク朝国家とに対しておこなった軍事的進出のもとで、日蓮 (一二二二~八二) とイブン・タイミーヤ (一二六三~一三二八) とがそれぞれ思想的に格闘していた現実の相同性も、そのケースといえるだろう (これについては、

歴史家上原専禄 [一八九九～一九七五] が先駆的な省察を提示していた。岩波市民講座 [一九六五年・六六年] における上原の有名な講演「日蓮とその時代——世界史認識の意味と方法によせて」・「モンゴル人の〈世界征服〉と十三世紀ユーラシア世界—日蓮認識の意味と方法によせて」。私は海外にいて上原の講演は聴けなかった。だが偶然にも同じ時期に、私は、上原の足元にもおよばぬ浅薄な内容ながら、類似の着想をカイロはラウダ島の歴史家サロンで話していた。ふしぎな共時性を感じる)。

### 現実がテストする

もっとも、「n 地域」モデルの設計と検証は、それだけで宙を舞う単独の作業だったのではない。実際には、それは、「イスラーム」や「中東」や「帝国主義と民族」の研究をすすめる仕事場でおこなわれた。だから、「n 地域」論は、私がそのころ取り組んでいた問題群（「アラブ民族主義」／「アラブ社会主義」／「アラブの政治文化」／「ムスリム同胞団」／「イスラーム復興運動」／「世界分割」／「第一次世界大戦後の民族運動」／「ユダヤ人問題とパレスチナ問題」／英仏から米ソへの覇権構造の遷移／国際政治における中東問題の「楕円構造」化／「湾岸問題」の将来／等々）に関連して書いた個別論文とも、直接・間接、また陰に陽に、かさなりあっていた。

民族主義者や民族主義政権、さらに一般に政府・民衆運動を問わず政治指導者[たち]は、毅然とした独立と卑屈きわまる従属とにはさまれた縞模様しまの襞ひだのどのあたりを着地点として、選択することに結局なったか（歴史研究）、またやがて選択するだろうか（リアルタイムの洞察・予見）。それはリーダーたちが、民族運動（Q）に対してどんな呼応・応答・対決姿勢をとるか、多様な選択肢のスペクトルと向きあって揺れながら、最終的にくだす政治決断にかかっている。

だが待てよ、それはリーダーだけのことか。あらゆる個人が、切り立つ稜線りょうせんのどこで／いつ／転落するかわからず、せまい尾根道を風圧に耐えて伝つたい歩きしながら、活路を探っているようなものではないのか。これが「n 地域」を主体的に生きる「アイデンティティ選択」のきびしい一面でもあるだろう。

### パレスチナ n

なんといっても、パレスチナ問題は「n 地域」問題そのものである。もともとパレスチナは、世界諸方面からやってくる巡礼者／宗教者／遊学者／旅行者／そしてときどき侵略者／が通過し滞留し溶けこむ場だった。一九世紀末からは、アメリカ大陸や西アフリカに出稼ぎにおもむく一部住民もいたかわり、シオニズムによるロシア・東欧からの入植運動が展開される場となった。それはヨーロッパにおける社会労働運動の動向と直結していた。パレスチナで「ユダヤ人社会」の急膨張がはじまるのは、一九三三年ドイツでナチ党が政権を掌握したからだった。イスラエル国家の成立（一九四八年）をはさんで二〇世紀のパレスチナは、英・仏をはじめ列強の帝国主義、米・ソ関係、国際連盟・国際連合の動きなど国際政治の渦うずにもあそばれた。反テロ戦争で開幕した二一世紀のグローバル問題の軸心じくしんは、パレスチナにある。パレスチナに在る者も／不在を強いられた者も／関与者も／局外をきめこむ者も／世界中あらゆる人が、n 地域としてのパレスチナに直面しているのだ。

### B イスラームの無力化と可能性